

# 患者の皆様へ

令和3年7月5日

皮膚科

現在、皮膚科では、「皮膚の炎症、腫瘍における皮膚細胞、免疫細胞の活性化分子の発現解析と予後評価」に関する研究を行っています。今後の治療に役立てることを目的に、この研究では2011年4月から2021年3月までに生検、手術で採取された組織や診療情報などを利用して頂きます。診療情報などがこの研究で何のために、どのように使われているのかについて詳しく知りたい方は、下記の窓口にご連絡ください。

## 1. 研究課題名

「皮膚の炎症、腫瘍における皮膚細胞、免疫細胞の活性化分子の発現解析と予後評価」

## 2. 研究の意義・目的

皮膚の炎症性疾患の多くは現在でも原因不明です。そのため炎症を抑える治療として、免疫全体を強く抑制してしまったり、他の臓器にも多くの副作用を及ぼしたりするステロイドや免疫抑制剤に頼った治療を行うケースが多いです。しかし最近、特定の皮膚炎症性疾患で強く働いている増殖因子を発見し、それだけを選んで抑制する薬剤を使用すれば、それまでの治療と比べて少ない副作用で高い効果を発揮することがわかりました。実際にそうした薬剤は、アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬といった炎症性皮膚疾患で臨床応用されています。しかし効果が十分でない患者さんも多いのが現状で、まだわかっていない皮膚細胞、免疫細胞の活性化分子、増殖因子などを研究することが望まれています。

皮膚がんの多くも原因不明であり、現状では多くの正常細胞に副作用を出しながらがん細胞の増殖を抑え込むような薬剤で治療されています。しかし最近、がん細胞だけに強く働いている増殖因子を発見し、それだけを選んで抑制する薬剤、あるいはがんを攻撃する免疫細胞だけを活性化するようなシグナルを発見し、がんに対する免疫だけを増強するような薬剤が、一部の皮膚がんにも強い効果を発揮することがわかり、臨床応用されています。しかし効果が十分でない患者さんも多く、まだわかっていない皮膚がん細胞、免疫細胞の活性化分子、増殖因子などを研究することが望まれています。

本研究では当院で2011年4月から2021年3月までに生検、手術で採取された皮膚組織や診療情報を利用してまだわかっていない皮膚細胞、皮膚がん細胞、免疫細胞の増殖因子などを探索し、それらを標的とした、副作用が少なく効果が高い、新しい治療法の開発に繋げるのが目的です。

### 3. 研究の方法

試料としては、当院で過去に採取され、ホルマリン固定、パラフィン包埋されて保存されている組織を使って、治療薬の標的になる可能性がある分子の出ている場所や量を、免疫染色という技術を使って検討します。診療録情報としては、年齢、病名、罹患期間、受けた治療の内容、受けた治療の効果、治療後の経過、死亡した日、血液検査データを利用させていただきます。

### 4. 個人情報の取り扱いについて

本研究で得られた個人情報は、匿名化して管理し外部に洩れることのないように厳重に管理します。研究成果の発表にあたっては、患者さんの氏名などは一切公表しないこととします。データ等は、千葉大学大学院医学研究院皮膚科学研究室の鍵のかかる保管庫で保管します。

### 5. 研究に診療情報などを利用して欲しくない場合について

ご協力頂けない場合には、原則として結果の公開前であれば情報の削除などの対応をしますので、下記の窓口にご遠慮なくお申し出ください。

文部科学省・厚生労働省による「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいて掲示を行っています。

**研究実施機関** : 千葉大学医学部附属病院皮膚科

**本件のお問合せ先** : 医学部附属病院皮膚科

医師 猪爪隆史

043 (222) 7171 内線 5332